

ルイーズ・ミシェル略伝

川口幸宏訳注

簡単な紹介[原注]

ルイーズ・ミシェルは、1830年5月29日、ヴロンクル[i]城で、城主・シャルル、エティアンヌ・デマイス — というより、おそらくその息子— と、召使い、マリアンヌ・ミシェルとの間に生まれた。

ルイーズ少女は、母親の手元に置かれ、城で育った。そして彼女がおじいさん・おばあさんと呼ぶ城主夫婦に慈しまれた（息子は彼女が生まれてほどなく家を離れている）。

少なくとも父親側の、ヴォルテール主義[訳注 1]の環境の中で、ルイーズは、自由主義的な[訳注 2]人格教育ときちんとした知的教育を受けた。彼女は快活で、やんちゃでな性格であったが、とりわけ、きわめて幼い頃から、他には見られない愛他的な精神を示していた。— 彼女は、人や動物のどんな苦痛をも見かければ和らげずにはおられず、また貧しい人にはお祖父さんからもらっていた自分のお金を…、そしてお祖父さんから盗ったお金を、分け与えた。ショモン[ii]での学業の後、彼女は、今日では小学校教諭[訳注 3]と呼ばれる「助教師[訳注 4]」として従事することを許可する能力資格認定書を得た。しかし彼女は帝国に宣誓することを拒み、1853年1月—もしかするとそれより前に—、ウドゥロンクール[iii]（オート-マルヌ県）に私立学校[訳注 5]を開設することを選んだ。1855年まで、ウドゥロンクールで、引き続き同じ地方のミリエル[iv]で、実際的で共和主義の考えに裏打ちされた教育—当局から何らかの懲戒を受けなかったわけではなく—実践をし、3年後、ルイーズ・ミシェルはパリに住みつくにいたった。そしてシャトー-ドオ通り[v]の、ヴォリエル婦人が経営していた私塾[訳注 5]で働くのだが、その婦人とはやがて子どもも同然の絆で結ばれることになる。ルイーズ・ミシェルは、その頃、活発に散文や韻文を書き—彼女はヴィクトル・ユーゴーに幾編かの詩を書き送っていた—、反対派の諸新聞[訳注 6]に寄稿し、夜間講座を受講し、ヴァレ、ヴァルラン、リゴール、ウド、そして彼女が熱愛したテオフィル・フェレと出会った公衆の集会に通った。

1883年4月5日の警察の報告書によれば、ルイーズ・ミシェルは「1869年の早いうちから政治活動に参加していた」。彼女の名前は、1869年12月21日の『ラ・マルセイエーズ』に引用されており、また「労働者が仕事のために本分に悖り、あるいは本分に帰ることを援助することの目的のために設立された、徳化民主協会」[訳注 7]の幹事の名前にもある。しかし、ルイーズ・ミシェルは、自立心の強い性格の人で、行動に移すのに39歳になるまで待てなかったと、

見られているようである。いずれにせよ、翌年、1月12日、男装をし、服の中に短刀を隠し持ち、彼女は、ピエール・ボナパルトによって殺されたジャーナリスト、ヴィクトル・ノアールの葬儀に参列した10万人か20万人のパリの人々の一員となっている。

彼女は国際労働者同盟に加盟したのだろうか？1878年6月27日の警察の報告書は、正確な場所と日付とを明示せずに、そう断言している。

1870年11月には、彼女は18区市民の監視共和国委員会代表に選ばれた。夜、彼女は会合、とりわけ『危機にさらされた祖国』クラブに足繁く通い、昼間は、1865年に彼女によって創設された通学制学校（18区のウドン通り[vi]24）で指導管理[訳注8]にあたった（参照、『ラ・ソシアル』1895年12月23日）。そして、飢えたパリで、彼女は、生徒のために食堂をつくった。

1871年1月22日、パリ[訳注9]が、政府の無気力と、次には変節の精神を告発するために、政府に対して示威運動をした時、ルイーズ・ミシェルは、国民衛兵軍の服を着て、パリ市役所の戦闘の場に加わっている。

3月18日、コートの下にカービン銃をたずさえ、モンマルトルの監視委員会の活動メンバーと一緒に、彼女は、「モンマルトルの丘の襲撃に」参加した。ルイーズ・ミシェルは、その後、全身全霊、力を尽くした。と同時にプロバガンディスト、第61大隊の衛兵、野戦病院の看護婦、そして相変わらず知的教育や人格形成の問題に専心した。彼女は、18区の、サン・ベルナル・ドゥ・ラ・シャペル教会[vii]で、しばしば議長を務めた『革命』クラブをリードした。彼女は生きた教育、つまり職業学校や世俗の孤児院を推奨した。それらは皆、今日では当たり前のようになっているが、しかしその当時は新しいものであった。彼女はイシー[viii]とクラマル[ix]で先頭を切って戦い、あるいは逃げ離散する兵士を再び糾合した。彼女が戦闘の最後の砲火を放ったのは、何十人も男たちと一緒にいたクリニャンクール通り[x]のバリケードであった。彼女は逃がれた。しかしその後、捕らえられた母親の釈放のために自首した。

第6回軍法会議の前に、彼女は、ヴロンクル市役所およびウドゥロンクル市役所、18区代表から品行の証言を得ている。彼女は、にもかかわらず、1871年12月16日、ある城壁砦[訳注10]への流刑の宣告を受けた。1879年5月8日、刑は単なる流放に軽減され、その後は10年の流放（6月5日）、最終的には流刑を解かれた（12月16日）。

オブリーヴ（オート-マルヌ県）[xi]の中央刑務所に20ヶ月拘留された後、ルイーズ・ミシェルは1873年8月24日、ヴァージニア号で送られ、4ヶ月かかってニュー・カレドニア[訳注11]に降り立った。いつものように、ルイーズ・ミシェルは、自身のことよりも他者を気遣い、男

性の規則以外の規則を受けることを拒んだ。

教育にかける情熱は相変わらずで、彼女はカナカ族の啓蒙[訳注 12]に努めた。そればかりか、鎮圧に協力したコミユナルのうちのある人々とは違って、1878年に「彼女は、アテ酋長のリードで島の圧制に対して立ち上がった、カナカ族の反逆者を大いに賞賛した」（P. オレリィ、前掲書、参照）。

1879年に彼女はヌメアに居住する許可を得、さらに、まず流刑囚の子どもに対しての教育[訳注 13]、さらに女兒学校[訳注 14]でのデッサンと音楽の教師を許された。

1880年11月9日、彼女はニューヘヴンからディエップ[xii]経由でパリ、サン・ラザールに着いた。彼女は熱狂的な歓迎を受けた。

フランスに戻った後、ルイーズ・ミシェルは、死に至るまで、その当時は党派や連盟に構成されていないアナキスト運動を強く求めた。そのことによって、彼女は、本来の自分となると、確信した。ルイーズ・ミシェルは、だいたい、アナキスト以外の何者でもなかったのだろうか？もしある日付を定めるならば、彼女は『無政府主義者』の記事で（1月17日付）、「私は、私たちがカレドニアに送られたとき、アナキストになった。」と明言したことから、1896年としたらよいだろう。

疲れを知らない闘士、彼女は、フランスで、外国ではイギリス、ベルギー、オランダで、およそ百回いや、おそらく千回の講演をした。

1881年7月、彼女はロンドンでの国際アナキスト会議に出席した。その会議は、地方連盟の独立と、労働者の解放のためもっとも有効な手段がプロパガンダであることを、正式に認めた。

彼女は1883年3月9日、失業者に演説をし、それから、黒旗[訳注 15]を振りかざして、アンヴァリッド広場[xiii]から、警察によって四散させられたモベル広場[xiv]へと、エミール・プジェとともに、デモを先導した。1886年6月3日には、J. ゲドゥ、P. ラファルグ、スジニ医師とともに、ワトラン事件で有罪の判決がなされようとしていたデカゼヴィル[xv]のストライキ参加者を守るために演説をした。1887年1月、彼女は、労働者[訳注 16]デュヴァルに科せられていた死刑反対の表明をした。1888年、ジョセフ・トルトゥリエと同時に、ゼネストの有利となるような積極的なプロパガンダを展開した。1890年5月1日にあわせて、彼女はゼネストをうった。1890年から1895年には、ルイーズ・ミシェルはロンドンで生活した。そこで彼女は、一時期、フランス語系無政府主義者グループが創った学校を経営した。時にはルイーズ・ヌーヴェルと呼ばれた友人シャルロット・ヴォヴェルと一緒にロンドンに渡ることがあったが、フ

ランスに帰国して、中断していた巡回講演を再開した。まずは 1895 年から 1897 年にセバスチャン・フォールおよびマタと、次いで 1903 年から 1904 年にはエルネ・ジロルと。

1898 年には、ドリュフス事件の騒乱に関与した。

言うなれば、ルイズ・ミシェルは、警察機関に追いかけられ、幾度となく、鎮圧を受けた。そこで、おそらく不完全ではあるけれどもできるだけ詳しく、パリ・コミューンの積極的な活動故に被った有罪判決を含めないで、その一覧を次に示しておく。

1882 年 1 月 9 日：警察官侮辱により 2 週間の拘留（ブランキーの命日のデモ）

1883 年 6 月 23 日：5 月 9 日の失業者デモにより 6 年間の禁錮（パン屋略奪）。1886 年 1 月 14 日釈放（クレマンソーとロッシュフォールの介在により、1883 年 4-5 月に、数ヶ月後死亡するが、重篤の母親に会うことを許された。1884 年 1 月 5 日母親は埋葬された。）

1886 年 8 月 12 日：殺人扇動により 4 ヶ月間拘留（J. ゲドゥ、ポール・ラファルグ、スジニ医師と一緒に；彼女は労働者の有利になるように演説をしていたので、ストライキを打っていた町・デカズ[xvi]の、技師・ワトランの死の責任者として裁かれた。11 月釈放。）

1890 年 4 月 30 日：逮捕、6 月初め控訴棄却決定の二つの命令の末、釈放。

ルイズ・ミシェルの性格の本質的な側面のいくつかを強調する必要があるとするならば、我々は、二つ記憶に止めるだろう、すなわち勇気と善良と。また我々は、このことを強調するために、当人によってなされた二つの声明を引用する。第一は、彼女が、1871 年 12 月 16 日に、第 6 回軍法会議の議長であったデラポルトゥ大佐に対して発した最後の強い口調での語りかけである。

「私は全身全霊、社会革命に身を捧げている（…）意味をなしていない軍法会議を招集し、私の裁き手となり、まぎれもなく恩赦委員会であると欺瞞するあなたに、私が要求すること（…）それはとっくに私たちの同志の墓場となっているサトリー演習場[訳注 17]だ。

私を社会から抹消しなければならない；社会はあなたにそうしろと言っているのだ；それなら、共和国の検事は正しい！自由のために高鳴る心臓が少々の鉛の玉を受けるしか権利はないように思われる以上、私は私の鉛の玉の分け前を請求するのだ、私は！もしあなたが私を生かしておくというのなら、復讐を求めることを止めないだろう。つまり私は、我が同志たちの復讐のために、恩赦委員会を殺すように呼びかける。」（判決録、1871 年 12 月 17 日）

第二は、1888 年 1 月 22 日にル・アーヴル[xvii]で彼女が被ったテロ行為の三日後、襲撃者の妻に宛てた手紙である。

「あなたの悲嘆を知りましたが、ご安心いただきたく思います。落ちついてください。あ

あなたの夫が分別を持って行動したとは思われません。だから、彼があなたに戻されないなんてことはあり得ません。

私の友人も、医者も、パリのマスコミも、ル・アーヴルのマスコミも、忘れることなく、あなたの夫が自由の身になることを、自由になる時まで、要請することを止めていません。

それとそれがあまりにも遅れるようなら、私がル・アーヴルにとって返しましょう。そして今度は、私の講演が、ほかならぬ裁判のその措置を得るためだけでもたれるでしょう。町の人全部がそこにおりますように。」（『ル・アーヴル労働者の考え方』1月28日－2月5日号、による。）

ルイーズ・ミシェルはエルンスト・ジロールと行った講演の巡回講座の途、マルセーユで死亡した。彼女の亡骸はパリに連れて帰られ、葬儀では、リヨン駅からレヴァロア墓地へと、数えきれないほどの、非常にたくさんの人々の列が続いた。葬列は、その場を目撃した人や葬儀に参加した人、すべての人々に感銘を与えるものであった（警視庁史料館の何冊もの分厚い関係書類がこのことに費やされている）。多くの人々が発言をしたが、その中に、「世界友愛支部の支部長」がいる。フリーメーソン[訳注 18]の記章や紋章には彼女の柩が登録されている。葬儀の主催者がルイーズ・ミシェルはどんな組織にも所属しなかったことを強調している。しかしながら、同時代を体験したロルロットは、ルイーズ・ミシェルは「人権」の支部に所属したと、断言している（『自由なイデー』1959年4月、参照）ーチリフォック E. を見よ。1916年まで、墓に向かって毎年デモが行われた。

（出典）

ルイーズ・ミシェル『ラ・コミューン 歴史と思い出』

初版 1898年、改訂新版 1970年、再版 1999年

ラ・デクヴェルト発行

[原注] ジャン・メトロン監修『フランス労働者運動事典』（ウヴリエール出版）第7巻、351－353ページ、「ルイーズ・ミシェル」の項、抜粋。転載の許可をいただいたジャン・メトロンおよびウヴリエール出版に対し感謝申し上げます。

[訳注 1] ヴォルテールはルソーの同時代人。ルソーが平等主義論者として扱われるならヴォ

ルテールは自由主義論者。両人は対極にあり激しい論争を繰り広げた。ヴォルテール主義は「宗教的懐疑主義」と訳されるが、ここでは、「反教会的反教権主義」の意味で捉えたい。

[訳注 2] 教会の権威から離れて自由であることを主義とする立場。

[訳注 3] 原文は institutrice

[訳注 4] 原文は sous-maîtresse

[訳注 5] 原文は une école libre

[訳注 6] 原文は l'institution[…….]qui dirigeait une dame Vollier たんに資金面の経営だけではなく指導にもあたる。

[訳注 6] 原文：(aux) journaux d'opposition. 第二帝政（ルイ・ナポレオン）下の国民議会での野党的立場にある諸新聞

[訳注 7] la <<Société démocratique de moralisation, ayant pour but d'aider les ouvrières à vivre par le travail dans le devoir ou à y rentrer>> 当時の労働者の置かれていた状況は過酷で（労働時間が長い、等々）、自ずと、労働者の間には退廃的な生活の姿が見られた。また、そのような労働者の相手もする売春婦の悲惨な生活も見られる。社会の底辺に生きる男女がこのような状況から脱することができるように作られた組織。

[訳注 8] 原文は dirigeait

[訳注 9] Paris とは、ここでは、パリの民衆のこと。政府は普仏戦争で 1871 年 1 月 19 日敗戦を認め、パリの開城と降伏とを決定した（停戦協定は 1 月 27 日）。パリ民衆は、かねてから「自発的に『国民衛兵』と呼ばれる義勇兵組織を作り上げて」（河野健二著『フランス現代史』山川出版社）さまざまな反対・抵抗を行ってきたが、これを屈辱的だとし、1871 年 1 月 22 日、市庁舎他の襲撃事件となった。

[訳注 10] 原文は une enceinte fortifiée 本文後記の Auberive ならびに Nouvelle-Calédonie のこと。

[訳注 11] 南太平洋にある島。1853 年以来フランス領。1864 年～1896 年まで、流刑を含む徒刑場とされた。

[訳注 12] 原文は instruire

[訳注 13] 原文は enseignement

[訳注 14] les écoles de filles フランスでは、当時、男女別学であった。

[訳注 15] drapeau noir. アナーキストの旗。海賊旗とも言う。

[訳注 16] le compagnon. 徒弟制時代の「独立職人」の意より、今日の労働者に近い。当地は炭坑の町。

[訳注 17] le champ de Satory 「パリ・コミューン」事後処理の収容所の一つ。虐待を受けたり、処刑のための銃弾を受けたりして倒れたものが多数いる。

[訳注 18] 「フリーメーソン(Freemason)」とは、アメリカ・ヨーロッパを中心として世界に組織を持つ慈善・親睦団体。18世紀初頭ロンドンから広まる。貴族・上層市民・知識人・芸術家などが主な会員で、理神論に基づく参入儀礼や徒弟・職人・親方の三階級組織がその特徴。普遍的な人類共同体の完成を目指す。（『広辞苑』第五版、岩波、より該当項目の抄録）

- [i] Vroncourt (Meurthe-et-Moselle 県)
- [ii] Chaumont (Haute-Marne 県)
- [iii] Audeloncourt (Haute-Marne 県)
- [iv] Millière (Haute-Marne 県)
- [v] Rue de Château d' Eau (パリ 10 区)
- [vi] rue Houdon (パリ 18 区)
- [vii] St-Bernard de la Chapelle (パリ 18 区)
- [viii] Issy
- [ix] Clamart
- [x] la chaussée Clignancourt (現在は、Rue de Clignancourt パリ 18 区)
- [xi] Auberive (Haute-Marne 県)
- [xii] Dieppe (Seine-Maritime 県)
- [xiii] Esplanade des Invalides (パリ 7 区)
- [xiv] la Place Maubert (パリ 5 区)
- [xv] Decazeville (Aveyron 県)
- [xvi] 前記 Decazeville
- [xvii] Le Havre (Seine-Maritime 県)